

## 序章

### 0-1. コープランド、その今日的な受容像

本論は 20 世紀のアメリカ合衆国〔以下、アメリカ〕の作曲家アーロン・コープランド（Aaron Copland, 1900-1990）の 1930 年代から 40 年代の音楽活動について、〈歴史修正主義〉の観点から再考するものである。アメリカの音楽を代表するこの作曲家は、しかし、今日ではどのように受容されているのだろうか。われわれはまず、アメリカで共有されている彼の今日的な受容像の典型を確認する必要があるが、その際、連邦議事録における「アーロン・コープランド氏への賛辞」は適当な資料となろう。これは 1990 年の第 101 回アメリカ合衆国連邦議会上院において、現在の国務長官であるジョン・ケリー民主党上院議員によって当時生誕 90 年を迎えようとするコープランドに献呈されたものであり、当時のアメリカ国民の総意を反映したものと考えられる。したがって、以下では多少長い引用とはなるが、同時に、彼の歩みを概観することも企図して、その全文を引用することにした。

ワシントン、金曜日、1990 年 7 月 20 日

アーロン・コープランド氏への賛辞<sup>1</sup>

〔ケリー議員〕 大統領、本日私は、かの創造性豊かで傑出したアメリカの作曲家、アーロン・コープランド氏を讃うべくここに参りました。しばしば、アメリカ音楽の合衆国大統領と称される通り、アーロン・コープランド氏〔の存在〕とは、アメリカそのものであります<sup>2</sup>。ピューリッツァー賞<sup>3</sup>からオスカー<sup>4</sup>まで、また、大統領自由勲章<sup>5</sup>から議会名誉黄金勲章<sup>6</sup>まで、その生涯で、およそ表彰され得るあらゆる名誉が実際に授けられた通り、コープランド氏は極めて多くの榮譽を讃えられました。彼は交響楽、コラール、ピアノ曲をはじめ、オペラ、バレエ、映画音楽、室内楽を作曲し、また、ハーバード大学で詩学を講義し<sup>7</sup>、五十歳代半ばを超えてからは指揮に取

り組みました。コーブランド氏に思いを馳せることは、しかし、そのたくさんの榮譽を数えることではなく、まさに、アメリカの音楽を考えることになりましょう。

コーブランド氏にとって、この国は偉大な音楽的着想源でした。氏は、かつて、こう述べています。「アメリカの音を [殊更に] 作ろうとしてきたとは言えません。つまり、私が書いたこととは [正しくは] ただ自らが実際に聞いたことだけなのです。 [アメリカの] あらゆる部分に魅了されてしまうかのごとき心情というよりも、表現における私のアメリカ的な感情には、むしろ、ある種の抑制を含んでいるのです」、と。ここから、氏の視点が 1990 年代初頭におけるブルックリンのワシントン通りにあった商店での生活によって形作られたものであったことは明らかであり<sup>8</sup>、それは決して彼から離れなかったことが分かります。[だから] 後年、モロッコ・タンジールの市場へ旅した際、氏は、「この全てをブルックリンで見たことがある」とも同行者に語るのです。

作品《アパラチアの春》、《ビリー・ザ・キッド》、あるいは《庶民のためのファンファーレ》、そのいずれであろうと、コーブランド氏の音楽は時代と地域を越え、アメリカの世紀<sup>9</sup>とその国民を反映します<sup>10</sup>。「ボストン・グローブ」紙のリチャード・ダイヤー氏は、次のようにコーブランド氏の音楽を述べました。「ある曲はフランス的であり、あるものはラテン的であり、また、あるものはアメリカ的である。あるものは高潔であり、またあるものはシリアスで、さらに、あるものは極めて愉快である。ある曲はニューイングランドを想起させるが、最もよく知られる曲では古い西部...<sup>11</sup> おそらく中西部の人達こそは、オペラ《入札地》が、いかに十全に、かの地を再現しているかを理解することであろう。「ある曲はまるで夏の夜のベランダのように快適であり... 時折、それは都会の躍動と孤独の両方を想起させ... その全ては、われわれの歴史における時間と場の全てを想起させる、それは、あの『コーブランド的音楽』<sup>12</sup>の数小節を聞くだけで充分である」、と。

今日、コーブランド作品を聞くこと、それは、われわれが信じるアメリカの記憶を呼び起こすことでありますが、そのようなアメリカは、もはや、われわれの心の中にしか存在しないのかもしれない。[しかし] 都会のざわめきから地方の静かな地平まで、また、都市の喧噪に疲弊した精神の孤独からアパラチアでの精神的孤高まで、好景気の到来、喜びの分ち合い、あるいは勝

利の旗に高まる誇り、これは、今もなお<sup>13</sup> アメリカであります。われわれは、無数の誇り高き営為、終わることない夢、そして静かなる大志、今もなお、これらを有する地平にいます。われわれの国は、今もなお、進歩と挑戦を希求します。そして、先祖から受け継いだものよりも、さらなるものを後世に残し得ることを信じるのです。まさに、それがアーロン・コーブランド氏の不朽なる音楽なのであり、そして、それこそが不動なるアメリカなのであります<sup>14</sup>。

作曲仲間であるヴァージル・トムソン氏は、かつて、彼を「われわれの世代におけるアメリカの声」と呼びました。そしてまた、われわれにとって、アーロン・コーブランド氏は、常にアメリカの全世代の声であり続けることでしょう<sup>15</sup>。

この賛辞が捧げられた 1990 年から四半世紀を経過した今日でも、コーブランドがアメリカの音楽文化にとって大きな存在であることに変わりない。彼は今なお、しばしば「アメリカ音楽の旗手」<sup>16</sup> と称され、それは、活動上での深いつながりがあったボストン交響楽団が、2011 年に、その拠点たるタンゲルウッドの地に、音楽家として最初となる彼の胸像を設置していることにもその一端が見られる<sup>17</sup>。

演奏会以外の場においても、彼の音楽はテレビ等のメディアを通して身近であり続けている。たとえば、一般に最もよく知られるのが 1992 年から現在に至るテレビ・ラジオ広告、全米肉牛生産者協会 [NCBA] の「ビーフ、それがディナー」キャンペーン (Beef, what's for dinner) で使用されている旋律であろう。これは彼のバレエ《ロデオ》(Rodeo, 1942) からの〈ホーダウン〉(Hoe-down) である<sup>18</sup>。その旋律は、彼のオリジナルではなく、1941 年にジョン・ローマックス (John Lomax, 1867-1948) が実地音声採集の上でまとめたアメリカ民謡集『我が歌の国』(Our Singing Country, 1941) に収録された《ナポレオンの退却》(Bonyparte) から引用したものであった<sup>19</sup>。また 90 年代に AT&T やジェネラル・モーターズといった企業がバレエ《アパラチアの春》(1944) における〈シンプル・ギフト〉を使用し<sup>20</sup>、加えてアメリカ海兵隊の新兵募集の広告では《庶民のためのファンファーレ》(1942) が使用された<sup>21</sup>。ポピュラー音楽分野での編曲利用としては 1970 年代に幾つか見受けられるが、中でもエマーソン・レイク・アンド・パーマーのものが有名であり、さらに同曲はウッディー・ハーマンがジャズ・アレンジを施したほか、ローリング・ストーンズもライブ・オープニング・サウンドで利用している<sup>22</sup>。

さらに、政治キャンペーンの場でも彼の旋律が聞かれる。1996 年 11 月、民主党クリントン大統領

が二選目の勝利宣言を地元アーカンソー州で行なった際は、打ち上げ花火とともに前述の〈シンプル・ギフト〉が奏され、家族の肩を抱き花火を見上げる新大統領がNBC放送で全国に放映されれば<sup>23</sup>、2000年のブッシュを大統領候者に決定した共和党全国大会でも、その開会のタイミングに《庶民のためのファンファーレ》が奏された<sup>24</sup>。その他、7月4日の独立記念日の式典には、たびたび同曲が奏されている<sup>25</sup>。このように、今日のアメリカ国民にとって、コーブランドは、いわば、アメリカの良心を象徴する藝術家<sup>26</sup>にして、しかも、その存在は比較的生活に身近であり、まさにアメリカの文化的風物詩の一つとして受容されていると言える<sup>27</sup>。

ここでは、もう少し詳細に、今日のアメリカにおける彼の一般的な受容像の輪郭を探ってみたい。独立記念日の式典、海兵隊リクルート、及び老舗大企業による広告などをはじめ、コーブランドの響きは、アメリカの文化的、政治的「保守」を想起する局面と共にあるが、彼に対する「保守」的受容の所在は、また、国民の総意たる先のケリー賛辞においても示されている。それは、コーブランドの音楽が「もはや、われわれの心の中にしか存在しないかもしれ」ない「われわれの信じるアメリカの記憶を呼び起こす」と述べる件に読める〔原文は附録資料1を参照のこと〕。ここでの「記憶」とは、単なる過去の経験以上の内容を示唆していることは言うまでもなく、たとえばそれは、アメリカの古き良き時代には現前したと考えるアメリカの属性、いわば、過去から息づく、アメリカという国や文化を象徴する永遠普遍の本質というべきものに他ならない。一方で、賛辞が示すとおり、普遍とはいえども、かかる「本質」の今日の存在は自明ではなく、およそ、意志をもって「信じ」ねばならぬ程に不確かである。すなわち、アメリカの実相を議論する際に現れる見解の相違を超え、いかなる立場からも自明とされる合理的存在ではない。然るに、かかる不確かさにもかかわらず、それが呼び起こされると述べる立場の思想的背景には、そもそも、喚起の対象たる、かの「本質」がアプリアリに存在するという強い信念が前提にあらねばならない。国や文化をめぐるこのような信念の存在ゆえに、この賛辞には「保守」的な性格が指摘されねばならないのである〔ここでの「保守」の語は、「革新」と対比させながら、あらためて本論 0-7-2.にて定義した。関連して 6-2. も参照されたい〕。この賛辞は、さらに、国民の総意としての位置づけをもっている。したがって、このような文脈の中でコーブランドが讃えられていることから、この作曲家の今日の一般的な受容像の性格は明らかである。